

特許間引用のカテゴリ化：被引用数計測の精緻化に向けて Categorizing patent citation function for elaboration of the measurement of citation frequency

学籍番号：201121721

氏名：鈴木 裕

Yutaka SUZUKI

学術論文や特許と言った膨大な数の文献情報の集合に対し、定量的な評価がなされることがしばしばあり、その評価尺度の一つとして、それがどれだけ他の文献内で引用されているかを表す数値である「被引用数」がある。過去の研究から、被引用数と特許の重要度には密接な関係があることが示唆されている。

しかし、安直に「被引用数＝重要度」とする見方が広がることを懸念する意見もあり、引用行動パターンはさまざまであることから、それらの重みを一律に扱うのは極めて危険であると指摘されている。そのような意見がある一方で、特許の引用行動パターン（動機）についての研究はこれまでほとんど行われてこなかった。

引用の動機を類型化できれば、評価者がより重要と考える特定の動機に基づいた引用に重みを付け、被引用数が同数の特許でも計量的価値に差をつけることが可能となる。そのような評価が可能な分析を実現する環境を整えるため、本研究では、特許が他の特許を引用する動機のカテゴリ化を試み、それらの技術分野別分布状況を調査した。

本研究では、1998～2007年の公開特許公報を調査対象とし、このうち1998年に出願された特許を「標本特許」と定め、標本特許がその公開後10年以内にどのように引用されているか、特許が属する技術分野と経時的变化に注目して調べた。この調査の結果から、特許の引用動機の類型として、引用者の発明が既存技術の問題解決・代替・上位互換であることを示すために行われる「垂直的引用」と、引用者の発明にとって引用されている技術情報そのものが有用である「水平的引用」の2種類のカテゴリを設定した。さらに各カテゴリの傾向を把握するため、技術分野別分布状況の比較を行った。

本研究により、全体的に特許は垂直的に引用されるという傾向や、引用される特許が出願されて間もないころは水平的引用が多いが、引用年齢の増加にともない垂直的引用の割合が増加する傾向が把握できた。また、技術分野間で「水平的引用」と「垂直的引用」の比率が異なること、公開特許公報内の【発明の実施の形態】または【発明を実施するための最良の形態】で引用される特許は水平的引用である可能性が高いこと、【発明が解決しようとする課題】、【従来の技術】、【背景技術】で引用される特許は垂直的引用である可能性が高いこと等がわかった。

研究指導教員：芳鐘 冬樹

副研究指導教員：岩澤まり子